

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 26 日現在

機関番号：37103

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24652053

研究課題名(和文)末期浮世草子から初期読本にいたる「舌耕」の影響についての研究

研究課題名(英文) Study on influence of "zekko" in the period from terminal ukiyo-zohshi to initial yomihon

研究代表者

榎澤 葉子 (KASHIZAWA, Youko)

九州女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号：90227190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：末期浮世草子から初期読本にいたる該当する作品についての、版本書誌学を踏まえた資料調査、書誌調査、および複写資料(デジタル資料を含む)の収集については、当初の計画通り、ほぼ実施することができた。

収集した末期浮世草子や初期読本の作品を読み、「舌耕」をキーワードにして、その内容や特徴を検討・考察する点については、同じく「舌耕」を特徴とするものの、その基盤となるものが、当初推定していたより多岐にわたったため、今後の課題も残されている。たとえば、同じ作者であっても、作品によって文体が異なることがある点に、当時のどのようなジャンル意識が窺えるのかなどについては、引き続き研究していきたい。

研究成果の概要(英文)：I was able to carry out as scheduled about the following points. Firstly, it is the document investigation of the periods from terminal ukiyo-zohshi to an initial yomihon. Secondly, it is a bibliography investigation and collection of copying documents (including the digital document). My future problems are reading the works of terminal ukiyo-zohshi and the initial yomihon, in a keyword "zekko", which I collected, and examination of those contents and characteristics. The reason is that the bases of "zekko" were more various than I estimated at first. I will study, in future, what kind of genre consciousness at that time is indicated, on the base of the facts that varied in a writing style even in the same author's works.

研究分野：日本近世文学

キーワード：日本近世文学 江戸文学 浮世草子 読本 奇談 舌耕 怪談

1. 研究開始当初の背景

(1) 私は過去に、科学研究費の助成の下、「近世期における怪談集・奇談集の研究」(平成5年度、奨励研究A)という課題で網羅的に調査・研究を進め、近世中期の怪談集・奇談集における時代的特徴や地域的特徴を明らかにした。その過程で、『古実今物語』(宝暦11年刊)などの「実録風」読本を著した清涼井蘇来の表現・文体に注目することとなった。

(2) 近世中期の怪談集・奇談集を研究していく中で、書肆の活動、特に吉文字屋市兵衛の動向にも着目した。これまで「最も時代の嗜好の推移に敏感な書肆」という評価はあるものの、「文学への理解を示しているように思えない」といった見方が主流であった吉文字屋だが、彼が述べる自己の文学観をみると、そうした見方にとどまらないように思えたからである。

そして、再び科学研究費の助成の下で、「吉文字屋本についての研究」(平成6年度、奨励研究A)という課題で研究を進めたが、その過程で、荻坊奥路(大雅舎其鳳)に注目することとなった。其鳳は、濱田啓介氏によって、奥路と同一であることが立証された作者だが、彼は吉文字屋の末期浮世草子の大部分に関わっているからである。

(3) 「近世小説史」における、浮世草子から読本へと続く問題については、近年、飯倉洋一氏が研究を進められている。たとえば、「浮世草子と読本のあいだ」(『国文学 解釈と教材の研究』第50巻6号、2005年6月号)において飯倉氏は、「浮世草子が終焉してないうちに読本が始発する事実、換言すれば浮世草子史と読本史を重ねると三十年ほどの重複期間があるということからすれば、その空白を埋めるといっても、重複期の文学史をいかに構築するか、あるいはその時期の文学的状况をどのように把握するかということが、『浮世草子と読本のあいだ』を考えることになるのではないかと思う。」と述べられている。そして、「近世中期から後期にかけて、『近世小説史』の中心が浮世草子から読本へと移行し、その移行期が享保から宝暦明和にかけての散文史的に混沌とした時期であるとは、大方の研究者の共通する認識だろうと思われる。」とも言われる。飯倉氏は上記の問題について、「奇談」をキーワードに、近世上方の初期読本成立と関わらせる形で研究を進められている。

2. 研究の目的

(1) 前述したように、私は、過去に科学研究費の助成の下で、主に近世中期の怪談集・奇談集を網羅的に調査・研究を行った際、清涼井蘇来の表現・文体に注目した。読本初期の一作者である蘇来と、浮世草子末期の作者である荻坊奥路(大雅舎其鳳)とに共通する特徴として、その文体に「舌耕調」とも言う

べき傾向が顕著に見られるためである。

この清涼井蘇来は、夙に中村幸彦氏や濱田啓介氏によって、その素材や表現について注目された作者である。ただ、蘇来についてのまとまった研究はなく、拙稿「清涼井蘇来の著作をめぐる」(『雅俗』第3号、1996年1月)において、その著作が整理されたにとどまる。

(2) 談義本や実録体小説の研究に見られるように、「近世小説」において、「舌耕」の影響を考えることがなかったわけではない。しかし、談義本が発生し、実録体小説が文学化したと言われる宝暦・明和・安永期は、また、浮世草子末期から読本初期にあたる。前述した清涼井蘇来や荻坊奥路(大雅舎其鳳)について考えると、そうした末期浮世草子や初期読本の中に、それぞれ「舌耕」の影響を受けたと思われるものが存在することになる。それらを統一した視点で把握し、その上で比較検討することは、飯倉洋一氏が述べられた、浮世草子から読本への問題を考える上で、新たな視点を持ち、きわめて重要なテーマであると言える。

(3) 荻坊奥路(大雅舎其鳳)が上方の作者であるのに対し、清涼井蘇来は、その素性ははっきりしないものの、江戸の作者であると思われる。そうした点も、浮世草子から読本へと続く問題について考える際、飯倉氏が述べられている近世上方の初期読本成立との関係とは、また別の視点や問題をはらむ可能性があると言える。

(4) 本研究では、末期浮世草子と初期読本において、文体や素材に「舌耕」の影響を受けたものについて考察し、「舌耕」という視点から、浮世草子から読本への散文史の問題を考えることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 平成24年度は、まず、末期浮世草子と初期読本、およびその周辺作品について、できるだけ作品を網羅した目録を作成した。その際には、先行研究の成果は勿論のこと、自らが過去に行った科学研究費の課題「近世期における怪談集・奇談集の研究」(平成5年度、奨励研究A)と、「吉文字屋本についての研究」(平成6年度、奨励研究A)などの研究成果も、利用できるものは利用した。

(2) 次に、作成した目録を活用して、以下のように資料調査および資料収集を行った。その際は、それぞれの作品について、できる限り諸本の調査を行った(マイクロ資料およびデジタル資料も含む)。調査に際しては、後印本や改題本の問題も含め、版本書誌学の方法を適切に踏まえて行った。

平成24年度に行った資料調査および資料

収集のための遠距離出張は、東京都（国立国会図書館・国文学研究資料館）が2回であった。

平成25年度に行った資料調査および資料収集のための遠距離出張は、東京都（国立国会図書館・国文学研究資料館）が2回、京都府（京都大学文学部・京都大学附属図書館）が1回であった。

平成26年度に行った資料調査および資料収集のための遠距離出張は、東京都（国立国会図書館・国文学研究資料館）が2回、京都府（京都大学附属図書館）が1回であった。

平成27年度（補助事業期間延長）に行った資料調査および資料収集のための遠距離出張は、東京都（国立国会図書館・国文学研究資料館）が2回であった。

(3) 以上のような基礎的な作業を踏まえた上で、調査・収集した末期浮世草子と初期読本、およびその周辺作品について、素材や文体等に「舌耕」の影響を受けたと思われるものを選び出した上で、それぞれの作品を比較検討し、内容を考察した。

前述したように、談義本が発生し、実録体小説が文学化したと言われる宝暦・明和・安永期は、また、浮世草子末期から読本初期にあたる。そうした末期浮世草子や初期読本の中に、それぞれ「舌耕」の影響を受けたと思われるものを統一した視点で考察し、その上で比較検討することを試みた。

4. 研究成果

(1) 以上の研究方法によって得られた研究成果について、調査・収集した末期浮世草子と初期読本、またはその周辺作品における注目した作者ごとに、先行研究も踏まえつつ記述していく。

清涼井蘇来

前述したように、清涼井蘇来は、夙に中村幸彦氏や濱田啓介氏によって、その素材や表現について注目された作者である。濱田氏は『日本古典文学大辞典』（1984）の『古実今物語』の項目において、「八文字屋本と読本との間に立つ作品として最も注目すべきもの」と評価された。ただ、蘇来についてのまとまった研究はなく、拙稿「清涼井蘇来の著作をめぐって」（『雅俗』第3号、1996年1月）において、その著作が整理されたにとどまっていた。

本研究課題において、網羅的に作品諸本の書誌調査を行った結果、前掲拙稿を補足および修正する必要性があったため、「清涼井蘇来の著作について（補遺）」（『雅俗小径』所収）において発表した。

また、文体という点に着目すると、蘇来の「奇談物」である『今昔雜異談』と、「実録物」である『古実今物語』や『当世操車』とでは、明らかに文体が異なり、後者の方に「舌耕調」が顕著であることがわかる。

同じ作者の作品でありながら、作品によっ

て文体が異なることがある点は、後述する荻坊奥路（大雅舎其鳳）などにも共通するので、こうした点が、当時のジャンル意識を考える上で、一つの示唆を与えられる。

なお、鈴木圭一「写本『古実今物語』・『当世操車』考」（『読本研究新集』4、2003）は、これらの作品に写本が多く存在していること、また、それらが人情本などでどのように享受されていったかについて詳しい。蘇来の「実録風」読本が、当代に人気を博しただけでなく、後世にも影響を与えたことが知られる。

荻坊奥路（大雅舎其鳳）

前述のように、夙に濱田啓介氏による論考があり、奥路と其鳳とは同一の作者であることが立証された。彼は吉文字屋の末期浮世草子の大部分に関わっており、後述する永井堂亀友と並んで、末期浮世草子における最大の作者の一人である。

荻坊奥路（大雅舎其鳳）については、近年、近藤瑞木『吉文字屋専属作者荻坊奥路の浮世草子に関する調査研究（課題番号17520120）』（科学研究費補助金研究成果報告書、2009）において、奥路の著作書誌解題が報告されている。

また、篠原進「『怪を談ずる』のユートピア 荻坊奥路の位置」（『青山語文』39、2009）、「末期浮世草子研究 其鳳と一芳」（『青山語文』40、2010）において、奥路（其鳳）の一部の作品は、「読本に限りなく近い浮世草子」（『太平記秘説』）、「実録と浮世草子との微妙なあわいに位置する新しい小説」（『敵討孝子伝』）と位置づけられる。

永井堂亀友

前述の荻坊奥路（大雅舎其鳳）と並んで、末期浮世草子における最大の作者である永井堂亀友については、夙に浅野三平氏の研究があり、その後、その伝記については、西島孜哉氏が、大坂町奉行所東組与力であり、俳諧や狂歌をよくしたと述べている。（『西鶴と浮世草子』1989）

その作品のほとんどが気質物であり、「気質物最大の作者」「新しいスタイルの気質物」（篠原進「ちやつちやむちやくの人 永井堂亀友の浮世草子」『西鶴と浮世草子研究 3別冊、2010』）であるとされる。

半井金陵

『世間化物気質』（明和7）、『世間自慢顔』（安永1）、『当世芝居気質』（安永6）などの浮世草子作者である金陵は、従来から演劇関係者かと指摘されていたが、廣瀬千紗子・正木ゆみ「『当世芝居気質』作者考 半井金陵は並木莊治なり」（『藝能史研究』174、2006）によって、金陵が博学の医師半井莊二であり、かつ歌舞伎作者並木莊二であることが明らかになった。

篠原進「物語の終焉 金陵と蛙井」（『青山学院大学総合研究所人文学系研究センター研究叢書』13、1999）では金陵に、「演劇や教訓書に依拠した想像力」を指摘している。

福隅軒蛙井

『遊眼嘶不老時宗』(明和4)、『一角仙人四季桜』(明和6)の作者である福隅軒蛙井の作品について、篠原進「物語の終焉 金陵と蛙井」(前掲)では、「本作の想像力が金陵の数倍も歌舞伎や浄瑠璃に依拠していた」と述べ、「浮世草子の断末魔のあがきが、そこに垣間見える」とする。

ただ、私は、『遊眼嘶不老時宗』の題名の角書きにある、「無音曲/非読本」に注目したい。そこに蛙井の作品に対するスタンスが確認できると考える。

(2)上記の作者および作品は、多くが末期浮世草子によるものであったが、以下、それ以外の、初期読本および談義本その他周辺の作品について、「舌耕調」の文体を交えるなど、注目した作品の一部を列挙する。

八景聞取法問(宝暦4)

舌耕夜話(宝暦5)

銀杏栄常盤八景(宝暦12)

世間常張鏡(明和5)

両空譚(明和6)

当世滑稽談義(明和8)

誠七百物語(安永頃)

このうち、とに関わったとされる小幡宗左衛門(高古堂主人)については、今後詳細に検討していきたい。

(3)以上、末期浮世草子から初期読本にいたる時期の散文作品について、注目した作者や作品について整理してきた。まだ詳細には検討できなかった作品もあり、今後も研究を進めていきたいと考えるが、本研究課題において調査・研究を進める過程で、以下のような新たな問題が生じるに至った。今後の展望として、下記に指摘しておきたい。

末期浮世草子から初期読本にいたる時代の散文作品群を、網羅的に調査・検討していく過程で、いわゆる「浮世草子」や「読本」といった、従来の文学史的ジャンルは、一定程度以上の意味を持たないのではないかと考えた。たとえば、前述した小幡宗左衛門(高古堂主人)の著作とされる作品に関して言えば、『新説百物語』(明和4)は読本に分類されるが、『倭織錦船幕』(明和7)は浮世草子に分類される。

末期浮世草子から初期読本にいたる時代の散文作品群を、「舌耕」という視点で網羅的に調査・検討していくと、浮世草子にも読本にも談義本にも分類しにくい作品が、この時期、多く存在しているのは事実である。(たとえば、『檠下雑談』、『雉鼎会談』、『茅屋夜話』、『舌耕夜話』。いずれも宝暦5)

また、夙に中村幸彦氏によって、読本発生の一要因とされた(「読本発生に関する諸問題」『近世小説史の研究』1973) 西向庵春帳の著作の如き仏教長編説話などとの関係も、「舌耕」という視点で再検討すべきと考える。

一口に「舌耕」と言っても、実録・講釈風

あり、演劇調あり、説話系ありと、当初考えていたより、内実は多岐にわたっている。こうした問題をどのように考えるのかも、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

櫻澤 葉子、「江戸の怪談・奇談」、日本風俗史学会九州支部、2014年4月26日、九州女子大学(福岡県・北九州市)

〔図書〕(計1件)

櫻澤 葉子 他、雅俗小径刊行会、雅俗小径、2015、138

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

櫻澤 葉子(KASHIZAWA, Youko)

九州女子大学・人間科学部・准教授

研究者番号: 90227190

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: